

# タトゥーや入れ墨に関する文化と意識の差

社会学部社会学科 19191175 山口快斗

## 要旨

本稿はタトゥーや入れ墨に関する歴史を江戸時代から遡り、そこから見えてくるタトゥーや入れ墨に関するイメージであったり偏見がなぜ出てくるのかを調査し、実際にタトゥーや入れ墨を入れている人にインタビューを行い、入れた経緯や世間でタトゥーや入れ墨を受け入れてもらえない現状、偏見がある事についてどう思っているのか、タトゥーや入れ墨を入れていない人にもタトゥーや入れ墨に対しての印象を実際に聞いて、どのくらい今の世の中がタトゥーや入れ墨に対して理解が追いついていないのか、なぜ理解されないのかを分析したものである。

分析の結果、江戸時代から入れ墨は犯罪者に罰として入れているもので元々悪とされていたものであった。そこからヤクザ映画などが流行り、ヤクザや一般的にみて強面の人がタトゥーや入れ墨を入れているイメージが根強くあったため、現在でもそのイメージが残り偏見や理解されにくいということが分かった。そのようなイメージを払拭するためにも、あくまでもタトゥーや入れ墨はファッションの一貫で、決して怖いものではないと言うことを理解してもらうことが必要である。